朝日新聞　２０１４年７月２６日　朝刊　３２ページ　北海道本社

教科書の中だけの震災にしたくない

北星学園大の学生ら

ボランティア経験、高校生に伝える

被災地で感じたことを高校生らに話す北星ネットの学生（右の3人）＝札幌市厚別区

北星学園大（札幌市）の学生でつくる北星学園大学学生支援ネット（北星ネット）が、東日本大震災の被災地へのボランティア活動を続けている。現地での経験を、付属高校の高校生に伝え始めた。「教科書の中だけの震災にしたくない」。そんな思いがこもる。

「2011年3月11日、あの日、みんなは何歳だった？　何をしていた？」

18日、北星ネットの部長で、社会福祉学部3年生の桜井健作さん(20)らが北星学園大付属高の生徒らに問いかけた。「宮城県内だけで北星学園大学の学生の3倍近い1万人余りの人が亡くなったり、行方不明になったりしています」

桜井さんは続けて、ボランティアで訪れた仙台市の様子を話した。「ボランティアが入ることで、被災地の方の心の復興を少しでも手伝うことができる。継続は力だと感じた」。当初は私語が聞こえていた教室が、静まりかえっていった。

北星学園大は東日本大震災直後から、学生ボランティアの派遣を続けている。これまでのべ200人の学生が被災地を訪れ、がれきの撤去や、仮設住宅の訪問などの活動を担った。9回目となる8月11日～9月13日の派遣は1回6日間の活動で、交通費や宿泊費は大学が負担する。学生への事前説明や現地での活動支援をするのが北星ネットだ。

桜井さんは「より多くの学生に現地に行ってもらいたい」と、北星ネットの活動に参加した。きっかけとなったのが、中学生への家庭教師のアルバイトだった。教科書にある「東日本大震災」を見ながら、震災が教科書の中の歴史の一こまになってしまうことへの危機感を感じた。

その思いを高校生にも伝えたいと今回、付属高で2回にわたって授業を受け持った。経済学部3年の深沢亜佳莉さん(21)は宮城県石巻市のボランティア経験を話し、「復興は地元の人たちだけでできるわけじゃない」と訴えた。

話を聞いた3年生の西山瑠乃さん(17)は「震災はテレビで見て、映画を見ているようで実感がなかった。先輩の話を聞いて身近に感じられた。いつかは私も何かをしたい」という。

北星ネットの会員は12人。桜井さんはボランティアを通じ、自分たちの力は微力かもしれないけれど、無力ではないと感じたという。「時には震災を思い出し、自分たちにできることをしよう。被災地のことを考え、親や友達と話し合うことだけでもいい」。高校生らにそう呼びかけた。

授業を聞いた付属高の家山敬史教頭は「大学生らの体験を聞いて、生徒らも何かを感じとっていた。このような機会を続けていきたい」と話した。

（大久保泰）

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。